賀茂真淵と源氏物語

――『源氏物語新釈』の注釈方法をめぐって――

高野　奈未

賀茂真淵の古典研究については、真淵自身が上代志向を強調したこともあって、『万葉考』をはじめとする上代文学研究に対する評価が中心とされ、中古文学研究および中古文学に対する認識についての実態の検討は十分になされているとは言えない。本稿では、真淵の中古文学研究の具体像を把握することにより、上代志向の実際について考えてみたい。

真淵の中古文学研究のなかで特に『源氏物語新釈』は、晩年の真淵が書簡において「源氏再考未了」と記し、『新釈』を再考する意向を示しているため、真淵自身は『新釈』を不十分なものと考えていたのだろうと見なされ[1]、真淵研究において省みられることが少なかった。また、『湖月抄』に書き入れる形式で注釈がなされているために『湖月抄』の踏襲に過ぎないと見られる一方で、源氏物語研究においては、真淵の個性的な解釈が部分的に取りあげられてもきた[2]。

以下、真淵の源氏物語に対する批判の内実を示したうえで、『源氏物語新釈』を検討し、『新釈』全体の方針、さらには真淵の古典注釈の方法を明らかにする。

一　真淵の源氏物語観

まず、真淵の源氏物語全体に対する評価と先行する注釈類の相違点を確認しておきたい。

中世以来、歌学において源氏物語は和歌に資する古典として捉えられており、俊成による『六百番歌合』における「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」という判詞はそれを端的に示すものである。近世においても、その考えはたとえば

次のように踏襲されている。

源氏一部の詞は皆歌によむ也。毎句歌にならぬはなし。されば中院殿の源氏講談の時に、烏丸殿の、源氏はすべて歌のちうなりと宣へば、中院殿、いかにもさなりと宣ひしよし也。

（『光雄卿口授』烏丸光雄述 岡西惟中記 天和三年以降成）

源氏物語の全ての言葉は歌となるものであると言い、和歌を詠むために有用な古典として位置付けられている。源氏物語を創作の題材として重んじる姿勢は、和歌だけでなく俳諧でも広く見られ[3]、源氏物語を尊重するのは当然のことであった。

ところが、真淵は源氏物語について、限定的な評価を行っている。次に掲げるのは、『歌意考』の一節である[4]。

源氏物語はたみるべし。こはこゝろことばも後の世によれるものにて、心むつかしくかしこげにくるしきさましたれど、ことばの中にいとよきもありて、後の人は歌にとりてよみぬるも、女などはよきなり。このものがたりは、うたも同じくことの心めぐり過、いとむつかしげなるところをばまねぶことなかれ。

（『歌意考』広本　宝暦一〇年までに稿本成立）

歌を詠むために源氏物語を読むことをすすめ、そこにはすぐれた「ことば」があり、女性はそれを歌に詠むのもよいという評価を与えている点は中世以来の源氏物語評価を受け継ぐものであるが、あくまで女性に限っている。一方、その趣意・表現について「むつかしくかしこげにくるしき」「心めぐりすぎ」といった性質を持っているとして批判している。後に述べるように、これは後世の文章が持つ過剰性に拠るものである。これらの評言は、真淵が古代の和歌と比較して後世の和歌を批判する際の次のような言葉と一致する。

今少しくだち行たる世にて、人の心に巧おほく、言にまことはうせて、歌をわざとしたれば、おのづからよろしからず。心にむつかしき事あり。

（『歌意考』版本　寛政一二年刊）

真淵は後代の和歌を批判するとき、時代が下るごとに技巧的になり、素直な心情を失っている点をとりわけ指摘する。そうした否定されるべき下った時代の性質が源氏物語にも見られることについて、真淵は批判的な姿勢を示している。源氏物語に対する非難は、「狂言綺語」や「好色」の観点からなされることは真淵以前にも多くあったが、それに対し真淵は、その文章表現をことさら問題にしているのである。

次に、『新釈』の方針を概括して述べている『源氏物語新釈惣考』から、源氏物語の内容に関する真淵の意見を見てみたい。『惣考』には、「此いへる事ども多くは荷田東万呂・安藤為章が論をとれり」と書かれているため、『新釈』は春満・為章の説を踏襲したに過ぎないとされてきたが、次に挙げるのは、先行する注釈類に見えない、真淵独自の意見を述べている箇所である。

宮中おきて正しからざれば、おもはぬまぎれ出来て、御身の為も臣の為もはて〳〵はよろしからず。況や私の家々の事にも人の交らひにも、各いはでおもふ事の多かるをいはざれば、各自のみのやうにおもはれて、人心のほどしりがほにしてしらざる物也。和漢ともに人を教る書丁寧にとくとむかふ人のいはでおもふ心をあらはしたる物なし。只此ふみよくその心をいへり。又源氏の密通にて冷泉院の生れ給ひ、しかも源氏うしろみしたまふ。もし此君藤原氏にしもあらば、皇の御つぎは絶ぬべし。しばらく其まぎれは人〻歯をくひしばるといへども、ともに皇子・皇女をとり合てかりにも他姓をせざるは、しかしながらこゝろしらひせるもの也。さて終に朱雀の神系にしもかへし奉りたるは、和文の諷刺ことに女の筆にてなだらかなる物から、此意をよくかうがへん人は身をふるはすべき物也。宮中のおきて正しからず、人情をよくしろしめさぬ故にまぎれあめり。是を度見そなはすすべらぎ、いかでか御心おかせ給はざらんや。此外、臣下にいたりても、准て家々の心おきて人々の用意と成べし。或は淫乱の媒となれとてにくむ人も侍れど、さしもあらず。人情の引所故是を見るに、うまずしてよく見れば、其よしあし自然に心よりしられて、男女の用意となれる事、日本の神教その物を以て諷喩するなり。日本紀をよみしにや、と仰られしはさるゆゑにや。（『惣考』「本意」）

真淵は傍線部のように、源氏物語は「いはでおもふ心」である人情を非常によく描いているとしつつ、物のまぎれは宮中の規範が乱れ、人情に通じていなかったために起こったものであるという。源氏物語が人情をよく描いているという主張は為章や熊沢蕃山などに見られるものであったが、[5]「物のまぎれ」の原因にまで人情を関連付けたことには、真淵の人情に対する関心の高さがうかがえる。

同じく「物のまぎれ」について述べた波線部では、藤壺と光源氏の不義は、そもそも皇子と皇女の配偶であり、これが「日本の神教」によって諷喩したものであると評価している。源氏物語と「日本の神教」との共通点を見出すこ

とは春満や為章の主張にはないものである。

以上、真淵の特色ある源氏物語観として、文章に対して批判的であること、「日本の神教」との共通点を見ていることを述べた。次章以下、それぞれの項目が注釈にどう反映されているか、『新釈』の内容を確認していきたい。

二　源氏物語の文章に対する批判

真淵は源氏物語について、後世の和歌を非難するときと同じく、「むつかしくかしこげにくるしき」「心めぐりすぎ」として批判していた。その批判の内実は、以下に述べるように伊勢物語注釈に示されている。

真淵は『伊勢物語古意』（以下、『古意』）において、伊勢物語と源氏物語の創作手法を明確にしたうえで、それぞれの文章の相違点を述べている。[6]

（伊勢物語は）いにしへの文の体にて、言少なくて意をこめたる事、かゝるものには又たぐひなし。よくとき得ん人は、古文の例と為べし。且其歌を相照して、こゝろを催す事まなぶべし。是をよく知て末々の物語やうの文をとき得るにたやすし。中にも源氏物語は此文をひろめたる所多しとあづまゝろのいはれし如く、よく見れば、げにこの文の一言をあまた言にいひ延べ、すべてのおもむきもしか也とおもひ得る事多ければ、それら見んには本をしる手よりあり。後の人は此文の詞をよく見ぬにや、させる事なしとおもへり。源氏の詞はまねぶべし。此詞はうつしとる事難し。源氏は後によれる文にて、事を書つくし、かつこゝろ・こと葉ともに薄し。伊勢はいにしへにつきたる物にて、心・ことば少くて篤き也。（『伊勢物語古意』「総論」寛政五年刊）

真淵は、伊勢物語を引き延ばして書かれた源氏物語の言葉を学ぶことは、伊勢物語の言葉にこめられた趣意を知る助けになるとして、限定的には源氏物語の意義をみとめている。右の伊勢物語と源氏物語の関係についての指摘が具体的に指すところは、以下に掲げる『古意』の記述によって知ることができる。

次に挙げるのは、『古意』の第一段、「初冠」の男が春日で姉妹に歌を読みかける段において、男の心情の描写である「おもほえずふるさとにいとはしたなくてありければこゝちまどひにけり」に対する注釈である。

源氏のは、木、の巻に、あばれたらんむぐらの門に、思ひのほかにらうたげならん人のとぢられたらんこそ、かぎりなくめづらしくはおぼえて、いかで、はたかゝりけんと、おもふよりたがへる事なんあやしう心とま

るわざなべきといふは、やがてこゝを書延つる也けり。

此文にはたゞ一くだりにのみ書たるを、彼は委しきに過たるやうにこそ、此わかちを見得て、古文のよろしきを知べし

（『古意』第一段）

伊勢では、思いがけず田舎には不釣り合いな女がいたので心動いた、とだけ書いているのに対し、源氏では伊勢のこの箇所をもとに、「らうたげ」「めづらしく」「いかで、はたかゝりけん」という語を加えるというように左馬頭の心情を具体的かつ詳細に描写する。真淵は、簡潔な描写を行う伊勢こそ「古文」であり、源氏との違いがあるという。

同様に「古文」としての伊勢を称賛する、第十四段の注釈を挙げる。この段は、「みちの国」に赴いた男が土地の女と共寝をするも、心惹かれず都へ去ってしまうという話である。右にあげるのは、共寝をする男について説明する「さすがにあはれとや思ひけんいきてねにけり。夜ふかく出にければ」に対する注釈である。(7)

源氏末摘花の巻に、何事につけて御心もとまらむ夜ぶかく出給ふと書るは、これをとれるにや。されど、こゝには心のとまらぬ事をいはでしらせたるぞ古文なる。

［割注］古文・今文のわかち、これらにて明らか也

（『古意』第十四段　稿本）

伊勢物語では、ただ夜深くに出て行ったと行動を述べるだけなのに対し、源氏物語は、何に対しても御心が留まるはずがあろうかというように、夜深く出て行く光源氏の心情を細かく説明している。真淵は、その心情を言葉で表さずに読む者に知らせるのが「古文」であり、それを細かに説明してしまうのは「今文」であるとしている。(8)

つまり、状況を少ない言葉で描写し、心情を醸し出すことができる表現を「古文」として、真淵が理想としていたことがわかる。源氏物語は「人の心」をよく表しているという点では評価に値すると真淵は考えていたが、その表現は心の動きをつぶさに説明し尽くしてしまっているがゆえに、批判すべきものと考えたのであろう。源氏物語を読むことが伊勢物語の読解の助けになるというのも、伊勢物語においては言葉に表わされていない、文章から読み取るべき心情が、源氏物語には書かれてしまっているからである。

源氏物語の文におけるこうした表現の過剰性が招く弊害に対する真淵の危惧は、『新釈』の個々の注釈においても次のように端的に示されている。(9)

しに入　夕霧の我も死いる心ちすればさるわが魂は此御からにとまれかしと思はるゝと也。此所の事ども益なく書過て聞ゆ。かゝること此作者のくせ也。

ここは、紫の上の死に際して、夕霧が「しに入魂のやがてこの御骸にとまらなむ」と思う場面である。現行の注釈では紫の上の魂が亡骸にとどまって欲しいと解されているが、真淵以前の注釈では、夕霧が悲しみによって自身も死んでしまうような気持ちであり、その自分の魂が紫の上の亡骸にとどまって欲しいと願っているとされていた。真淵も後者の解釈を踏襲したうえで、夕霧の心情をむやみに書きすぎた文章であるとして批判した。それは悲しみの心情を具体的に細かく説明し尽くそうとすることで、本来読者が感得すべきである心情が損なわれてしまっているからなのである。

（『新釈』「御法」）

このように意味をあからさまに説明し言い尽くすことが言い詰めた表現であり、和歌において心の「まこと」を詠み出すことを阻害するとして真淵がいさめたことは、拙稿で論じた[10]。真淵の源氏物語の文章に対する批判は、こうした歌学における方針と一致している。真淵は、表現の過剰性によって「まこと」すなわち古代の素直な心が失われることを危惧していたのである。

三　心情の重視

ここまで真淵が源氏物語の文章の過剰性を批判したことを確認してきた。しかしながら、真淵は『惣考』において、源氏物語は人情をよく描いているとして肯定的評価を与えてもいる。『新釈』の注釈を見ると、説明されない「情」に注目しつつ心情を重視して解釈を行う姿勢が指摘できる。真淵以後の注釈への影響を視野に入れつつ、以下に確認する[11]。

朝顔巻の紫の上の歌である「こほりとぢ石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながるる」について、真淵は次のように解している[12]。

氷とぢ　後撰　天の川冬は氷にとぢたれやいしまのたぎつ音づれもせぬてふ歌より出て、今の歌の本は紫の自ら物思ひ有をそへ、末は源の心のまゝに物し給ふをそへたり。或説にはたゞ折節のさま也といへどいとゑじ給ふがやう〳〵と少しなぐさめ給ふほどの夜なればさのみはあらじ。

（『新釈』「槿」）

ここは、紫の上が朝顔の斎院のもとにかよう光源氏に和歌を詠む場面である。紫の上の歌は、先行注釈ではただの叙景歌として捉えられていた。ところが真淵は、後撰集の

「天の川冬は氷にとぢたれやいしまのたぎつ音づれもせぬ」を本歌として指摘し、上の句は紫の上の物思い多い人生を、下の句は紫の上と対照的な光源氏の「心のまゝ」の生き方を詠んだ述懐歌として解釈した。源氏物語に示されている心情を見逃さずに読み取ろうとする真淵の姿勢がよく表れているといえるだろう。

真淵が源氏物語を理解するにあたってこうした心情の読解を重視していたことは、登場人物の心情を確認したうえで解釈を行う傾向が見られることからもわかる。ここでは、先行する注釈と比較してその傾向を確認しておきたい。

次に挙げるのは、六条御息所が、光源氏の訪れによって伊勢下向を考え直す場面の解釈であり、『新釈』が『湖月抄』説を踏襲している箇所である。

細　御息所の心也。　師　前にもふりはなれくだり給ひなんは、いと心ぼそかりぬべくとあり。源の朝けの姿のおかしきを、御息所のみ給ふにつけて、猶源を捨て下り給はん事はおぼしかへす也。　（『湖月抄』「葵」）

この部分の前の本文に、御息所自身が下向するときはさぞ心細いだろうと思っていたこと、光源氏のおもむきある姿をみて御息所が下向を考え直したことが書かれていることを『湖月抄』所引の「師説」は指摘する。『湖月抄』以前の注釈においてもこれと同様に、簡潔な事実の指摘のみとなっている。これに対して、『新釈』は内容についてはほとんど『湖月抄』を踏襲しながらも、次のように述べる。

なほふりはなれなん事　上にいふごとく、つらき方に思ひはてゝもはたふりはなれんも心ぼそく、又人におもひ下されて京にあらんもいかにぞやと、此二つ定かね玉ふに今源のまれにもかくおはしていひなぐさめ、且朝けのすがたにも心ひかるゝによりてまだ〳〵とゞまる方に思ひかへさるゝとなり。　（『新釈』「葵」）

『新釈』は『湖月抄』に対し、傍線部を付け加えている。下向したいと思う要因が『湖月抄』にはないのに対し、『新釈』では、光源氏に思われぬまま京にいるのもどうしたものか、という六条御息所の心情が述べられ、また、下向を迷っているところに「まれにも」光源氏が訪れて優しい言葉を掛けたことによって、それを考え直してしまうことになったという御息所の心情とそれに関わる要因がこまやかに解説されている。

同様に、先行注釈を否定するときにも、登場人物の心情に対する読解を踏まえて、真淵の解釈を提示するという手順を踏んでいる。

（本文）わが宿の花しなべての色ならばなにかはさらに

きみをまたまし
うちにおはする程にて、うへにそうし給。したりがほなりやとわらはせ給て
（頭注）わが宿の花し　細　をごりたる歌也。我宿の花のなほざりならぬよし也。　（『湖月抄』「花宴」）

花宴巻で、内裏で右大臣が光源氏に歌を詠み、それを光源氏が帝に報告する場面である。「わが宿の花しなべての色ならばなにかはさらにきみをまたまし」という右大臣の歌は、現代の注釈では「私の家の藤の花が、もしも通り一ぺんの美しさならば、どうしてことさらあなたをお待ち申しましょうぞ」と訳されており[13]、諧謔味を含んだ誘いの歌と解されている。ところが、『細流抄』を引く『湖月抄』は、右大臣の奢りが示された歌であると解している。先行注釈も同様である。『新釈』はこれを否定し、次のように述べる。

わがやどの　或説に、是をおごりたる歌といふはあやまれり。花をほめて宿をばいひ下し、源をばたふとめり。みかどのしたりがほ也とのたまふは、宿の花をほめたるを御たはむれにのたまふのみ也。実にをごりたらんにはいかで源もおはさんや。　（『新釈』「花宴」）

本当におごっていたのだとすれば、光源氏が機嫌を損ねないはずがなく、源氏がなごやかに帝に報告していることを根拠に、右大臣が光源氏への敬意を示した歌を詠んだからである、と解釈している。ここでは歌を聞いた光源氏の心情をその行動から推測することによって、『細流抄』を引用している『湖月抄』の説を否定するという手続きを行っている。

以上のような例は真淵が解釈の妥当性を確認する際の作業として注釈中に多く見られる。こうした方法は、正しい解釈をするための努力であると同時に、文章に人情がよく込められているということを示すものになっている。

本章冒頭に挙げた朝顔巻の歌の解釈は、現行の注釈では、紫の上の歌は真淵の説を踏襲し、述懐歌とするのが定説になっており、花宴巻についての解釈は、幕末の重要な源氏物語注釈である萩原広道『源氏物語評釈』にもそのまま引用されている。また、『新釈』は、桐壺巻で元服後の光源氏と藤壺が管弦の折に「琴笛の音に聞こえ通ひ」することについて、演奏によって「情」をも「通はす」ことを指摘するが、これもまた玉上琢弥氏以下、現行の注釈に採用されている[14]。このように直接的には描かれない「情」の読解を重視した真淵の注釈は、源氏物語の文脈に踏み込んだものとして、先行注釈に対する独自性が注目されよう。

和歌や人物の行動についてばかりでなく、真淵は風景の

描写に対しても、「情」を重視した指摘を行っている。

はだ寒き　是は万葉にも古今にも、秋風の肌寒ければいとゞ妹かはだへ恋しきよし多くよめるによりて書り

（『新釈』「桐壺」）

ここは更衣を亡くした桐壺帝のいる情景を「野分だちて、にはかに膚寒き夕暮れのほど」と描写していることに対して、万葉集・古今集などが「はだ寒き」ことによって恋人を恋しく思うことを典拠として指摘する。従来、情景として寒さを表すと解されてきた文に対しても、真淵は帝の情を喚起させるものとして描かれていると解している。

次に挙げるのは、賢木巻で朧月夜が光源氏に詠んだ歌である「木枯の吹くにつけつつ待ちしまにおぼつかなさのころもへにけり」についての解釈である。

木枯の　此歌さま〴〵の説もあれど皆あたりても聞えず。今考るにとり〴〵あしざまなるいひなしを聞につけておぼつかなく便を待してふ意と見ゆ。此文の中にあらしをもて人のたゝはしく云にたとへたること多き也

（『新釈』「賢木」）

歌自体の注釈がはっきりしないとしつつも、真淵は傍線部のように源氏物語本文中に、嵐を描写することにより、人がやかましく言うことを示す例が多いことを指摘している。

源氏物語の自然が登場人物の心情や心理を表象するものであるということは、秋山虔氏による指摘をはじめ、数多くの論考が重ねられている。[15]真淵は先に述べたように、本来、心情は言葉で説明してしまうものではなく、読む者が自然と感得すべきものだと考えていた。そのため、源氏物語においても、説明されている心情のほかに、直接的には示されていない心情をも注意深く読み取ろうとしたのであろう。真淵の解釈は、心情描写に踏み込むことに特に意を払っているため、源氏物語において一見情景描写と捉えられる表現に、心情描写が込められているという性質を指摘するものといえ、結果的に源氏物語の豊かな表現手法を示すことにつながっている。

四　皇統の尊重

ここまで、真淵の文章観と心情の読解の関連を示してきたが、次に真淵の源氏観のもう一つの特色である、「日本の神教」と源氏物語の共通性について考えてみたい。

この真淵が述べるところの「日本の神教」に関しては、鈴木日出男氏が『惣考』ならびに『新釈』の付録として別冊に仕立てた『別記』の記事を指摘し、「真淵の主張の眼目

は（中略）皇統本来の授受のありかたそのものにあった」と述べ、現代の王権論に繋がる示唆的なものと指摘した[16]。本章では、鈴木氏の論を踏まえ、『新釈』の注釈自体が皇統を尊重する物語読解によって成り立っていることを述べる。

真淵が、皇統を尊重する立場から、紫式部の執筆意図を諷喩として捉えているとする指摘は、次にあげる箇所を例に、すでに説かれているものである[17]。

人のもてなやみぐさになりて　此更衣は宮中にて人のねたむのみにて、もてなやみたるほどの事はなしと見ゆ。然るを公卿殿上人の目を側るは例の我まゝならひたる臣たちの思ひいふ事に侍り。（『新釈』「桐壺」）

桐壺巻において、帝が更衣を寵愛するのを、人々が楊貴妃になぞらえそうなほどに非難しているという場面であるが、真淵は桐壺帝が更衣を寵愛し過ぎたとは解さず、それを非難する臣下が間違っているという。真淵はまた、この箇所について、『新釈』の付録として別冊に仕立てた『別記』の稿本である静嘉堂文庫蔵『源注別記』においては、楊貴妃はよこしまな心を持ち、更衣はうつくしい心を持っていて対照的であることを示して、人々の非難の誤りを強調するため、つまり諷喩のために記されたものであると述べる。真淵は『源注別記』のこの箇所の文末に、「此中にもやんごとなきおぼしをもまじへて書つ」と後から書き入れており、さらに「心して見るべきなり」「されどいかがあらん」と一度は記した文章を削除している。「やんごとなきおぼし」とは、源氏物語の共同研究の相手であった田安宗武の説と見て間違いない。諷喩説を含んだこの一条は宗武の考えを交えて書いたものであり、よく心を留めるべきであると一度は書いたものの、真淵は疑念を持っていたことがわかる。こうしたこともあって、『新釈』は、宗武の意向を強く反映せねばならなかった窮屈な注釈と指摘されてもいる[18]。

実際、文学に教戒的要素をもとめることは、宗武の著作の特徴であった[19]。たとえば、真淵の『古意』を増補する目的で宗武が著した『伊勢物語註』には、「人の妻たらん女は殊に心とゞめて見るべき也」「女のなまざかしきを戒めたるなり」といった訓戒的な評語が散見する。これらは真淵の『古意』にはないものである。ここからも、宗武の影響のもと『惣考』で述べられる諷喩説が構築されたという可能性はある。

ただし、次にあげるように、『新釈』とほぼ同時期に書かれた真淵単独の著述でも同じような主張が見られる。

我国のむかしのさまは（中略）只天地に随て、すべらぎは日月也。臣（おみ）は星也。おみのほしとて日月を守れば、今もみるごと、星の月日をおほふことなし。されば天

つ日・月・星の古へより伝ふる如く、此すべら日月も臣の星とむかしより伝へてかはらず、世の中平らかに治れり　（『国意考』宝暦十年までに稿本成立・文化三年刊）

皇統を重視し、臣下はわきまえある行動によって皇統にある人物を支えることが古代から当然のことであると述べていることから、皇統を重視すること自体は真淵も考えていたこととして間違いない。

以下、『新釈』における皇統に関して注目される注釈を見ていきたい。真淵は、日本における本来あるべきふるまいについて次のように述べている。

うへつぼねに　とかくに上を崇とむ筋にて治るこそ此御国のためしなれ。　（『新釈』「桐壺」）

この箇所は、更衣が控えの間を帝の近くに与えられたことについて、それまでの注釈が帝の桐壺更衣に対する寵愛による異例の沙汰とする解釈を批判したものである。真淵は、帝の御休所に通うことを妨害された更衣が控えの間を与えられるのは当然のことであるという解釈を具体的に展開したのち、右のように常に帝の事情を尊重することが日本本来のふるまい方であると強調する。

同様に皇統を重視する姿勢は、親王が大臣よりも尊重され上位に配されることを真淵が源氏物語の基本方針として見ていることにもあらわれている。

かぎりあるたゞ人どもにて　諸の説に今の源に比べき人々あらずと也とのみいへるはこと尽ず。中比よりは、后にしも大臣の姫宮の立をならはしとし給を、六條院の紫・花散里は親王の姫君にて、親王は大臣の上に立こと此物語のさまなればこゝは記者の意得ありて書る成べし。そのよしは前々にいふ如く、此物語の后は皆前帝の皇女、或は前坊の皇女、今又明石中宮も准太上皇の御女也。是によるに今准太上皇に配すべきは皇女ならでは専らの御むかひめならずとすれば、況や后は皇女を立給はんことゝ記者の思へるにや　（『新釈』「若菜上」）

この場面は、左中弁が女三宮の降嫁先をめぐって、光源氏の妻たちが「かぎりあるたゞ人ども」ばかりであるのは、光源氏の身分にふさわしくなく、女三宮こそ妻として理想的であると言うところである。真淵は、ここで「たゞ人ども」とされている光源氏の妻である紫の上や花散里は実際には親王の娘であるが、あえてここではそう記すことによって皇女の身分の高さを強調するものであると指摘しつつ、親王が大臣よりも尊重されることは源氏物語の原則であると主張する[20]。

次にあげるのは、少女巻の解釈である。

四位になしてんと　親王の御子は四位より立り。光源氏は御父帝も親王に准じておぼし置て、今の御いきほひもことなれば、若君（稿者注、夕霧）の四位もとよりなれど、臣家とはことにて、王孫は一世・二世など幼より直ちに位高くて有などは人なみ〳〵のことして行末よき事もあらず。よりて引かへ無位にて学に入せ、大政とるべき設をせんとおぼす也。子孫をおとさじとおぼす故に学問させらるゝよし下に見ゆ。しかれば是は、王孫たちをいさめて政をとりつたへ皇威をまさんとするもとをいふ記者の意也　（『新釈』「幼女」）

ここは光源氏が元服する夕霧に勉学をつませようとして四位ではなく六位にしたとする箇所である。親王の子は本来四位になるはずであるが、若いうちに勉強をして政治を担う用意をして、代々の繁栄のために努力するべきであるという光源氏の意図を真淵は指摘する。そしてこの箇所の傍線部のように、皇統にある人物たちが子孫を厳しく教育し政治力を継承することで天皇の権威を増そうとするという本来あるべき皇権のさまを紫式部が述べているという。

次にあげるのも同様の例である。

源氏打しきり　臣より后の立給ふ例といふは、いまの都の初よりのことにて、いにしへ皇威盛なる時は多く皇親を后とし給ひ、もし天皇の御つぎ御わかき時などは、后やがて位にゐさせ給へり。かゝれば皇孫を后とし給ふ事ことわりと思ふ。此記者の意より終に秋好を立奉りぬ　（『新釈』「幼女」）

ここでは秋好中宮の入内を描く紫式部の意図を、古は皇統にある者が后になるのが普通だったことを示すことにあるとして、本来あるべき皇統のあり方を真淵は強調する。

さらに注目すべきは以下のやや強引な解釈である。

いにしへの人のよしあるにて　此北方（稿者注、桐壺更衣の母）は本王孫か。　（『新釈』「桐壺」）

ここでは桐壺の更衣の母を「もと王孫か」と指摘している。源氏物語本文にそう取れる箇所はなく、他の注釈にも見られない。真淵は、光源氏の母である桐壺更衣が皇統の一員であれば帝と桐壺の更衣も皇統にある者同士の組み合わせになり、そうした人物によって皇統が維持されるという、理想的な皇権のあり方が実現すると考えたのであろう。[21]

以上のように、真淵は、皇統の理想的なあり方を志向するものとして、源氏物語を理解しようとした。その理解は、注釈としての妥当性を必ずしも満たすものではなかったが、源氏物語の内容を古代の皇権と重ねて見ることで肯定的に

理解しようとする真淵の姿勢がよくあらわれている。

五　『新釈』における批判

最後に、『新釈』における源氏物語批判の対象を見ていきたい。

次にあげるのは、玉鬘が光源氏から帝の印象を聞かれて詠んだ「うちきらし朝ぐもりせしみゆきにはさやかに空の光やは見し」の和歌についての解釈である。

うちきらし　こは万葉に、打霧之（ウチキラシ）とも天霧合（アマキラヒ）とも多くよみて打くもりてふ語也。良之反利なれば、紀利と云も本は曇る事なるを、体に霧とはいふめり。然れば此歌の朝ぐもりせしといふは、徒らにかさなれり。此記者も万葉など委しからねば、此語を霧わたる事とのみおもひしにや。（『新釈』「御幸」）

雲が出ているという意味の万葉語である「うちきらし」の語が、誤って霧が出ているという意味で使われていると指摘し、傍線部のように作者が万葉に通じていないことを批判する。真淵は『万葉考』巻三において、「あまぎらひ」という語は「あまぐもりあひ」の転じたもので、「打きらし」「天ぎらし」なども「皆均し」と主張する。右の記述はそうした真淵の万葉学に基づくものである。真淵は万葉集について、心情をありのままに巧まず詠み出している点を評価するが、それと紫式部の記述が時に食い違うと真淵が考えていたことは、次の批判から明らかである。

なほ〳〵しき　これは思ふ心を有のまゝによめるを、此記者はまだしと思へるにや。凡此記者今めく心のみ有て、歌などはよくも侍らず。かくいふこそ人もあはれとおもはるゝをや。（『新釈』「東屋」）

浮舟とその母が、思ったことをそのまま詠んだだけの和歌を贈答しあう場面で、地の文が「なほ〳〵しきことどもをいひはかしてん」とすることについて、真淵にとっては理想的である、心情を「有のまゝ」に直接的に詠んだ歌を「なほ〳〵しき」つまりなんともない歌として詠んでいる紫式部を批判している。

これらの批判は、真淵が理想とする古代の「まこと」を詠んでいる万葉集およびその歌の性質から外れるためになされたものである。真淵の右の解釈は、批判に終始してしまい、解釈としての的確さを欠いている。また、歌学における真淵の批判対象である漢学の影響も次のように繰り返し非難される。

からめいたり　此記者たゞ楽天が詩に泥みて、かゝる様をこのみ書たり。（『新釈』「須磨」）

白氏文集を典拠として須磨の光源氏の住まいの様子が書かれる箇所である。この箇所が白氏文集によっていることは、真淵以前の注釈もふれているが、その是非については述べられていない。真淵はこれを紫式部が白楽天の詩に泥んで書いたものとして否定的に評価する。

次は、夕霧が漢学を積極的に勉強することで「やまとだましひ」を持って活躍して欲しいと光源氏が述べる箇所についての解釈である。

やまとだましひの　此比となりては専ら漢学をもて天下は治る事とおもへばかくは書たる也。されど皇朝の古皇威盛に民安かりける様は、たゞ武威をしめして、民をまつろへさで、天地の心にまかせて治給ふなり。人の心もて作りていへる理学にては、その国の治りし事はなきを、偏に信ずるが余りは、天皇は殷々として尊に過給ひて臣に世をとられ給ひし也。かゝる事までは此頃の人の知事ならずして、女のおもひはかるべからず。

（『新釈』「幼女」）

漢学を基礎と考えるあり方を強く批判し、「天地の心」に沿わない、理のまさった漢学を尊重するがゆえに政治が誤った状態に陥っていると指摘する。真淵は漢学によって古代の自然な心が阻害されることを紫式部が理解していないと非難するのである。

真淵が自らの歌学を積極的に主張したことは、批判を展開する箇所ばかりではなく、次に挙げる歌学書に関する記事からも明らかである。

和歌のずいなう　今、和歌髄脳とて有は浜成式・喜撰式・孫姫髄脳・石見女ずいなう・新撰ずいなうなどあれど、皆古へを知ぬ人の偽ごとにて皆一つも用にたらぬ物也。から歌にもさる様の四病・八病などいふ事の有をもて、皇朝の古へしらでかれにならひて作れるもの也。それが中に此文の比には皇朝の古学しる人絶てさる作りごとも多かりけん。

（『新釈』「玉鬘」）

この箇所は、光源氏が末摘花から贈られた「わかのずいのう」を厄介だとして返してしまう場面である。真淵は、当代のいろいろな「和歌髄脳」は昔を知らない人の作り事であるため全く役にたたないものとする。本文においては、「わかのずいのう」に拘泥しすぎることはよくないと光源氏が述べているものの、全く不要なものとまでは言っていない。真淵は、漢詩の詩病になぞらえる歌学書類に対する批判的印象を強調して読解を行っているのである。

真淵は、二章で確認した表現の過剰性、本章で見た漢学の尊重といった、真淵が言うところの下った時代の性質を

具体的に指摘し、批判を展開した。それらの指摘は、必ずしも源氏物語の内容に踏み込むものではなく、解釈そのものに対する真淵の誤解も少なからず見られはする。しかしながら本稿で検討してきたように、真淵の関心の中心は、本来の心情をありのままに表現することにあったのであり、それと反する性質を批判することによって、当代の読者にもその実践を求めたのが『新釈』なのであろうと思われる。

おわりに

真淵は、源氏物語について、本来は読む者がおのずと感得すべきである心情まで言い尽くしてしまっているために「まこと」を阻害するとして、その表現を批判した。真淵は、和歌と同じく、直接言葉には表さずに心情を込めた文章を評価したのである。『新釈』の注釈においては、源氏物語が漢学を重視し、古代を軽視することについて、批判を展開しているが、これらもまた古代の素直な心に反するがゆえになされたものである。このように古代を重視する姿勢は、源氏物語が皇統の正しいあり方を志向したものであること、説明されない「情」が文章にこめられていることについて、時に注釈としての妥当性を欠くほど積極的に指摘して評価することにもあらわれている。真淵は、先行する注釈・源氏物語論が主張してきた源氏物語を諷喩とする説、「人情」をよく描いているとする説を利用しつつ、理想とする古代の要素を強調する注釈方法を確立し、それに従って源氏物語を理解していた。こうした理解のもと、皇権や情に注目してなされた注釈は、真淵以前の源氏物語注釈に見られる準拠説や実証性の重視だけでは明らかにし得なかった表現の重層性を結果的に読み解くものとなっている。

【注】

（1）明和元年梅谷市左衛門宛書簡。徳満澄雄氏「『源氏物語新釈』の成立過程について」（『高知女子大学紀要（人文・社会）』29号　昭56・3）も同書簡を引用する。

（2）重松信弘氏は『新釈』について、「真淵の著としては、珍しく啓蒙的通俗的なところがあり、湖月抄からの転載も頗る多い」（『増補版新攷源氏物語研究史』風間書房　昭55）とする。現代の注釈における『新釈』の引用例は、本稿第三章に詳しく述べる。

（3）江本裕氏「源氏物語と近世文学―近世前期の『源氏』寓言説を中心に―」（『源氏物語研究集成　第一四巻』風間書房　平12）は、俳諧における源氏物語注釈の重視について述べる。

（4）鈴木淳氏「近世後期の源氏学と和文体の確立」（『講座源氏物語研究　第五巻』おうふう　平19）では、この序文を用いて真淵の否定的源氏物語観を確認している。

（5）源氏物語が人情をよく描いているとする評価が近世前期の源氏研究にもよく見られるものであることは、杉田昌彦氏「物語の「用」―効用主義的『源氏物語』観と国学者たち―」（『講座源氏物語研究　第一巻』おうふう　平18）に詳しい。

（6）真淵に先立って荷田春満は『伊勢物語童子問』において、源氏物語が伊勢物語をもとに書かれた物語であると指摘しているが、春満は二つの物語の優劣を述べることはない。春満の指摘を継承したうえで、伊勢物語と源氏物語の性質の違いを際立たせたところに真淵の眼目がある。岩原真代氏「荷田春満の物語史観とその影響―『伊勢物語』注釈と『源氏物語』注釈の間―」（『國學院雑誌』107巻11号　平18・11）は、『伊勢物語童子問』において「『源氏物語』は『伊勢物語』の写し、という見解が貫かれ」ていること、『新釈』の注釈に『童子問』に見られる説を踏襲した箇所があることを指摘する。

（7）『伊勢物語古意』は、真淵が改稿をたびたび行ったことが指摘されており、宝暦9年の奥書を持つ橘千蔭書写本が「真淵のその段階の稿を純粋に伝える本」とされる（田中まき氏「伊勢物語古意解題」『伊勢物語古注釈書コレクション第五巻』和泉書院　平18）。本稿で引用した箇所の内容は版本と稿本で違いはなく原則として版本に拠ったが、この引用箇所のみ稿本の本文のほうが意が通りやすいため、稿本の本文を掲出した。なお、真淵が引用している源氏物語の本文は、『新釈』が底本にする『湖月抄』も現行の注釈書の多くも「何事につけてかは御心のとまらん」とする箇所であり、違いがみられる。

（8）佐藤深雪氏が真淵の文章観について「『源氏物語』は中古の物語であり、『伊勢物語』は上古の物語であるという真淵の様式意識」（『綾足と秋成と―十八世紀国学への批判』）名古屋大学出版会　平5）というように、書かれた時代は平安時代であるものの伊勢物語を古代の理想的な文章の性質を持つものとして真淵は認識している。

（9）（1）の徳満氏の論考は、『新釈』の諸本調査によって、自筆本であり、二回目以降の書入を含む田安家本が、それまでの真淵自身の推敲を最もよく反映したものであると指摘し、この田安家本によって『新釈』の内容を検討すべきであると主張する。本稿では、この主張に基づき、田安家本（国文学研究資料館寄託資料）により検討を行う。

（10）拙稿「近世の長歌―賀茂真淵の長歌復興をめぐって―」（『日本文学』56巻6号　平成19・6）

(11) 原雅子氏は「賀茂真淵の物語注釈の心理的方法―『源氏物語』「若紫」の巻の解釈―」(『金蘭短期大学研究誌』27号　平8・12)において、若紫巻の『新釈』の解釈を検討して、『新釈』本文自体にも人情を重視した傾向が見られることを指摘し、「真淵は注釈という学問的営為の中で、人間の心理を解析し、あやを織りなす複雑な人間存在の関係を深切に読み解いていった。」と結論づけている。

(12) 針本正行氏は「江戸時代の源氏学」(『國學院雑誌』107巻11号　平18・11)において、準拠論では不可能だった「言葉のうちに脈打つ意味を喚起」するものとして、真淵のこの解釈を取りあげている。

(13) 阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源衛氏・鈴木日出男氏　校注・訳『新編日本古典文学全集20　源氏物語①』(小学館　平6)。

(14) 玉上琢弥氏『源氏物語評釈』(角川書店　昭40)。吉野瑞恵氏も「江戸時代注釈は藤壺の光源氏に対する感情をどう解釈したか」(鈴木健一氏編『源氏物語の変奏曲―江戸の調べ』三弥井書店　平15)においてこの解釈を取りあげ玉上氏の注釈にも言及している。

(15) 秋山虔氏「源氏物語の自然と人間」(『王朝女流文学の世界』東京大学出版会　昭47)

(16) 鈴木日出男氏「宣長の〈もののあはれ論〉」(『源氏物語虚構論』東京大学出版会　平15)

(17) この箇所は(16)の鈴木日出男氏も既に指摘するところであり、(2)に掲げた重松氏の論考も、『物考』とこの箇所を取りあげ、『新釈』の特徴として諷喩説を指摘する。

(18) (4)の鈴木淳氏の論考などに指摘がある。『源注別記』の書き入れについては、(1)の徳満氏の論考が取りあげている。

(19) 土岐善麿氏『田安宗武　第二冊』(日本評論社　昭18)

(20) 源氏物語本文において花散里の父は明らかにされていないが、真淵は花散里を親王の娘として解している。

(21) 吉野瑞恵氏は(14)に掲げた論考において、真淵が藤壺から源氏への愛情があったと解釈する例をあげ、藤壺と光源氏が相思相愛ならばさらにその理想性が輝くと指摘する。吉野氏の指摘は、本章で確認した皇統にある人物を尊重して源氏物語を解釈するという真淵の姿勢の一端にふれたものと言える。

＊『新釈』以外の賀茂真淵の著作の引用は『賀茂真淵全集』(続群書類従完成会　昭52-)により、『六百番歌合』は『新日本古典文学大系38』(岩波書店　平10)、『光雄卿口授』は『近世歌学集成上』(明治書院　平9)、『源注別記』は『静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成』(マイクロフィルム、雄松堂フィルム出版 昭56)、『伊勢物語註』は土岐善麿氏『田安宗武　第二冊』(日本評論社　昭

18)、『湖月抄』は『北村季吟古注釈集成』（新典社　昭52）による。なお、濁点・句読点を付し、旧字体の漢字を現行の字体に改め、平仮名を漢字にするなど、表記を私に改めた箇所がある。

（付記）本稿は平成20年度日本近世文学会春季大会（於大東文化大学）での口頭発表をもとにまとめ直したものである。発表席上、貴重なご教示を賜りました杉田昌彦氏、鈴木淳氏に深謝申し上げます。

本稿は平成20年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。